

# 旧藩情

福沢諭吉

青空文庫



旧藩情緒しよげん言

一、人の世を渡るはなお舟にのつ乗て海を渡るがごとし。舟中の人もとより舟と共に運動を與ともにすといえども、動やもすれば自みから運動の遅速ちそく方向に心付こころづかざること多し。ただ岸がんじよ上より望観ぼうかんする者にして始はじめてその精密せいみつなる趣おもむきを知るべし。中津なかつの旧藩士も藩と共に運動する者なれども、或は藩中に居いてかえつて自みからその動くところの趣おもむきに心付こころづかず、不知しらず不識しらず以て今日に至りし者も多し。独ひとり余輩よはいは所謂いわゆる藩の岸上に立つ者なれば、望観ぼうかんするところ、或は藩中の士族よりも精密ならんと思ひ、聊いささかその望観ぼうかんのままを記ししたるのみ。

一、本書はもつぱら中津旧藩士の情じようたい態たいを記ししたるものなれども、諸藩共に必ず大同小異に過ぎず。或は上士じようしと下士かとの軋あつれ轢きあらざれば、士族と平民との間に敵意ありて、いかなる旧藩地にても、士民共に利害榮えい辱じよくを與ともにして、公共のためを謀はかる者あるを聞かず。故に世上有志ゆうしの士君子しくんしが、その郷里の事態うれえを憂うれてこれが処置くわいを工夫くわうするとき当り、この小冊子もまた、或は考案の一助たるべし。

一、旧藩地に私立の学校を設るは余輩の多年企望するところにして、すでに中津にも旧知事の分祿と旧官員の周旋とによりて一校を立て、その仕組、もとより貧小なれども、今日までの成跡を以て見れば未だ失望の箇条もなく、先ず費したる財と労とに報る丈の功をば奏したるものというべし。蓋し廢藩以来、士民が適として帰するところを失い、或はこれがためその品行を破て自暴自棄の境界にも陥るべきところへ、いやしくも肉体以上の心を養い、不羈独立の景影だにも論ずべき場所として学校の設あれば、その状恰も暗黒の夜に一点の星を見るがごとく、たとい明を取るに足らざるも、やや以て方向の大概を知るべし。故に今の旧藩地の私立学校は、啻に読書のみならず、別に一種の功能あるものというべし。

余輩常に思うに、今の諸華族が様々の仕組を設けて様々のことに財を費し、様々の憂を憂て様々の奇策妙計を運らさんよりも、むしろその財の未だ空しく消散せざるに當て、早く銘々の旧藩地に学校を立てなば、数年の後は間接の功を奏して、華族の私のためにも藩地の公共のためにも大なる利益あるべしと。これを企望すること切なれども、誰に向てその利害を説くべき路を知らず。故に今この冊子を記して、幸に華族その他有志者の目に触れ、為に或は学校設立の念を起すことあらば幸甚というべきのみ。

一、維新の頃より今日に至るまで、諸藩の有様は現に今人の目撃するところにして、これを記すはほとんど無益なるに似たれども、光陰矢のごとく、今より五十年を過ぎ、顧て明治前後日本の藩情如何を詮索せんと欲するも、茫乎としてこれを求めるに難きものあるべし。故にこの冊子、たとい今日に陳腐なるも、五十年の後には却て珍奇にして、歴史家の一助たることもあるべし。

明治十年五月三十日

福沢諭吉 記

きゆうはんじょう  
旧藩情

旧中津奥平藩士の数、上大臣より下帯刀の者と唱るものに至るまで、凡千五百名。その身分役名を精細に分てば百余級の多きに至れども、これを大別して二等に分つべし。すなわち上等は儒者、医師、小姓組より大臣に至り、下等は祐筆、中小姓旧厩格供小姓、小役人格より足輕、帯刀の者に至り、その数の割合、上等は凡そ下等の三分一なり。

上等の内にて大臣と小姓組とを比較し、下等の内にて祐筆と足輕とを比較すれば、その身分の相違もとより大なれども、明に上下両等の間に分界を画すべき事実あり。すなわちその事実とは、

第一、下等士族は何等の功績あるも何等の才力を抱くも、決して上等の席に昇進するを許さず。稀に祐筆などより立身して小姓組に入たる例もなきに非ざれども、治世二百五十年の間、三、五名に過ぎず。故に下等士族は、その下等中の黜陟に心を関して昇進を求めども、上等に入るの念は、もとよりこれを断絶して、その趣は走獸あえて

飛鳥ひちようの便利を企望きぼうせざる者のごとし。また前にいえるごとく、大臣と小姓組との身分は  
大おおに異なるがごとくなれども、小姓組が立身りっしんして用人ようじんとなりし例は珍めずらしからず。大  
臣しんの二、三男が家を分わかてば必ず小姓組たるの法なれば、必ひつきよう竟きやう大臣も小姓組も同一種  
士族しぞくといわざるを得ず。

また下等の中小姓なかごしょうと足軽あしがるとの間にも甚はなはだしき区別あれども、足軽が小役人こやくにんに立身し  
てまた中小姓なかごしょうと為なるは甚やすだ易し。しかのみならず百姓が中ちゆうげん間なと為り、中間が小頭こがしらと  
なり、小頭の子が小役人と為れば、すなわち下等士族中に恥はずかしからぬ地位を占しむべし。  
また足軽は一般に上等士族に対して、下座げざとて、雨うちゆう中ちゆう、往來に行逢ゆきあうとき下駄げたを脱ぬいで  
路傍ろぼうに平へい伏ふくするの法あり。足軽以上小役人格の者にてても、大臣に逢あえば下座げざ平へい伏ふくを法  
とす。畜ただに大臣のみならず、上士じやうしの用人ようじん役たる者に対しても、同様の礼をなさざるを  
得ず。また下士かしが上士の家に行けば、次の間より挨拶あいさつして後に同間どうまに入り、上士が下士  
の家に行けば、座敷まで刀を持ち込むを法とす。

また文通に豎たて様ぎさま、美様びさま、平様ひらさま、殿付け等の区別ありて、決してこれを変ずべからず。  
また言葉の称しやうご呼こに、長少の別なく子供までも、上士の者が下士に対して貴様きさまといえば、  
下士は上士に向むかつてあなたといひ、来きやれといえば御おいでなさいといひ、足軽が平ひら士むらいに

対し、かち 徒士が たいしん 大臣に對しては、直にその名をいうを許さず、一様に だんなさま 旦那様と呼び、その交際は正しく まさ 主僕の間のごとし。また上士の家には玄関敷台を構えて、下士にはこれを許さず。上士は騎馬し、下士は徒歩し、上士には猪狩川狩の権を与えて、下士にはこれを許さず。しかのみならず文学は下士の分にあらずとて、表向の願を以て他国に遊うがく学するを許さざりしこともあり。

これ等の件々は逐一計うるに暇あらず。到底上下兩等の士族は各その等類の内おのおのに些少の分別ありといえども、動かすべからざるものに非ず。ひとり上等と下等との大分界かいに至ては、ほとんど人為じんいのものとは思われず、天然の定則のごとくにして、これを怪あやしむ者あることなし。(権利を異にす)

第二、上等士族を給きゅうにん人と称し、下等士族を徒士かちまたは小役人こやくにんといい、給人以上と徒士以下とは何等なんらの事情あるも縁組えんぐみしたることなし。この縁組は藩法においても風俗においても共に許さざるところなり。當に表向の縁組のみならず、古来士族中にて和姦わかんの醜し聞うづんありし者を尋るに、上下の士族各その等類中に限り、各等の男女が互に通じたる者ははなはだ稀まれなり。(ただし日本士族の風俗は最も美にして、和姦などの沙汰は極めて稀まれに聞くとところなり。中津藩士ももとより同様なれども、ここにはただ事実の例を示さんが



ために、その稀に有る者の数を比較したるのみ。)

かつ限ある士族の内にて互に縁組することなれば、縁に縁を重ねて、二、三百年以来今日に至ては、士族はただ同藩の好あるのみならず、現に骨肉の親族にして、その好情の篤きはもとより論を俟たず。然るに今日、試に士族の系図を開てこれを見れば、古来上下の兩等が父祖を共にしたる者なし、祖先の口碑を共にしたる者なし。恰も一藩中に人種の異なる者というも可なり。故にこの兩等は藩を同うし君を共にするの交誼ありて骨肉の親情なき者なり。(骨肉の縁を異にす)

第三、上等士族の内にも家禄にはもとより大なる差ありて、大臣は千石、二千石、なおこれより以上なる者もあり。上等の最下、小姓組、医師のごときは、十人扶持より少なき者もあれども、これを概するに百石二百石或は二百五十石と唱えて、正味二十二、三石より四十石乃至五、六十石の者最も多し。藩にて要路に立つ役人は、多くはこの百石名目のみ以上の家に限るを例とす。藩にて正味二、三十石以上の米あれば、尋常の家名目にて衣食に差支あることなく、子弟にも相当の教育を施すべし。

これに反して下等士族は十五石三人扶持、十三石二人扶持、或は十石一人扶持もあり、なお下て金給の者もあり。中以上のところにて正味七、八石乃至十餘石に上らず。夫婦暮

しなれば格別かくべつ、もしも三、五人の子供または老親あれば、歳入さいにゅうを以て衣食を給するに足らず。故に家内力かないりきえき役に堪たうる者は男女を問わず、或は手細工てせいく或は紡績ほうせき等の稼かせぎを以て辛かろうじて生計せいけいを為なすのみ。名は内職なれどもその実は内職を本業として、かえつて藩の公務を内職にする者なれば、純然たる士族に非ず、或はこれを一種の職人というも可かなり。生計を求むるに忙いそがしく、子弟の教育を顧かえりみるに違いとまあらず。故に下等士族は文学その他高こう尚ようの教に乏とほしくして自おのずから賤いやしき商工の風あり。(貧富を異にす)

第四、上等の士族は衣食に乏とほしからざるを以て文武の芸を学ぶに余暇よかあり。或は経史けいしを読み或は兵書を講じ、騎馬槍劍きばそうけん、いづれもその時代に高こう尚しようと名なづくなづくの学芸に従事するが故に、自おのずから品行も高尚にして賤いやしからず、士君子しくんしとして風致ふうちの觀みるべきもの多し。下等士族は則ち然しからず。役前やくまえの外ほか、馬に乗る者とは一人もなく、内職かたわらの傍わらに少しく武芸ぶげいを勉つとめ、文学は四書五經ししよごきよう歟か、なほ進すすんで蒙もう求きゆう、左伝さでんの一、二卷に終る者多し。特にその勉強するところのものは算筆さんひつに在ありて、この技芸いたつに至いたつては上等の企くわだて及ぶところに非ず。蓋けだしその由縁ゆえんは、下等士族が、やや家産かさんの豊ゆたかなるを得て、仲間なかまの榮譽りやうを取るべき路はただ小吏たるの一事にして、この吏人りじんたらんには必ず算筆の技芸を要するが故に、恰あたも每家教育まいかの風を成し、いかなる貧小士族にてもこの技芸を勉つとめざる者なし。

今を以て考うれば、算筆の芸もとより賤しむべきに非ざれども、当時封建士族の世界にこれを賤しむの風なれば、これに従事する者は自からその品行も賤しくして、士君子の仲間よわいに齒せられざる者のごとし。譬たとえば上等士族は習字にも唐様からようを学び、下等士族は御家流おいえを書き、世上一般の氣風にてこれを評すれば、字の巧拙こうせつを問わずして御家流をば俗様ぞくようとして賤いやしみ、これを書く者をも俗吏俗物ぞくじぞくぶつとして賤しむの勢いきおいを成せり。(教育を異にす)

第五、上士族の内にも小禄の貧者なきに非ざれども、概がいしてこれを見れば、その活計は入いるに心配なくして、ただ出いずるの一部に心を用もちうのみ。下士族は出しゅつ入にゅう共に心こころに關して身を勞する者なれば、その理財の精細せいさいなること上士の夢にも知らざるもの多し。二人扶持ににんぶちとは一箇月かげつに玄米げんまい三斗となり。夫婦に三人の子供あれば一日に少なくとも白米一升五合より二升は入用なるゆえ、現に一月二、三斗の不足なれども、内職の所得しよとくを以て麦むぎを買い粟あわを買い、或は粥かゆ或は団子だんご、様々さまざまの趣向しゆこうにて食たを足す。これを通語にて足し扶持ぶちという。食物もつすでに足たるも衣服なかるべからず。すなわち家婦かふの任にんにして、昼夜べつの別なく糸いとを紡つむぎ木綿もめんを織おり、およそ一婦人、世帯せたいの傍かたわらに、十日の勞ろうを以て百五十目の綿わたを一反おの木綿もめんに織おりあぐれば、三百目の綿わたに交こう易えきすべし。これを方ほう言げんにて替かえ引びきという。

一度は綿と交易してつぎの替引の材料となし、一度は銭と交易して世帯の一分を助け、非常の勉強に非ざれば、この際に一反を余して私家の用に供するを得ず。娘の嫁入前に母子ともに忙しきは、仕度の品を買ってこれを製するがために非ず、その品を造るがためなり。或はこれを買うときは、そのこれを買うの銭を作るがためなり。かかる理財の味は、上士族の得て知るところに非ず。この点より論ずれば上士も一種の小華族というて可なり。廢藩の後、士族の所得は大に減じて一般の困迫というといえども、もしも今の上士の家禄を以てこれを下士に附与して下士従来の活計を立てしめなば、三、五年の間に必ず富を致すことあるべし。(理財活計の趣を異にす)

廢藩の後、藩士の所得大に減ずるとは、常禄の高を減じたるをいうに非ず。中津藩にして古來度の改革にて藩士の禄を削り、その割合を古に比すればすでに大に減したるがごとくなるを以て、維新の後にも諸藩同様に更に減少の説を唱えがたき意味もあり、かつ当時流行の有志者が藩政を専にすることなくして、その内実は禄を重んずるの種族が禄制を適宜にしたるが故に、諸藩に普通なる家禄平均の災を免がれたるなり。然りといえども常禄の外に所得の減じたるものもまた甚だ大なり。中津藩歳入の正味はおよそ米にして五万石余、このうち藩士の常禄として渡すものは二万石余に過ぎ

ずして、のこり残およそ三万石は藩主家族の私用と藩の公用に供するものなり。

この公用とは所謂いわゆる公儀こうぎ（幕府のことなり）の御勤おつとめ、江戸藩邸はんでいの諸入費しよにゅうひ、藩債はんさいの利子こくゆう、国邑こくゆうにては武備城普請ぶびしろうぶしん、在方ざいかたの橋梁きょうりょう、堤防ていぼう、貧民ひんみんの救済手当きうさいてうたう、藩士文武ひきたての引立等ひきたて、これなり。名は藩士の所得しよとくに關係なきがごとくなれどもその実は然らず。譬たとえば江戸汐留しおどめの藩邸はんていを上屋舗やしきと唱となえ、広さ一万坪余、周圍およそ五百間もあらん。類るい焼しょうの跡あとにてその灰はいを搔かき、仮かりに松板しょうばんを以て高さ二間許ばかりに五百間の外そとをなすに、天保時代てんぼうの金かねにておよそ三千兩なりという。この他、平日ふしんにても普請ふしんといひ買物かひものといひ、また私物はらいものといひ、經濟けいぎの不始末ふしまつは諸藩同様しよはんどうがう、枚挙まいきよに遑いとまあらず。もとより江戸の町人職人の金儲かねもつけなれども、その一部分は間接かんせつに藩中一般はんちゆういぱんの賑にぎわいたらずるを得ず。また国邑こくゆうにて文武ひきたての引立ひきたてといへば、藩士はんしの面々めんめんは書籍しよじやくも拜借はいしやく、馬うまも鉄砲てつぱうも拜借はいしやくなり。借用きゆういんの品しんを用いて無月謝むげつせの教師けうしに就つく、これまた大なる便利べんりなり。なかんずく役人の旅費りょひならびに藩士一般はんしいぱんに無利足拜借金むりそくはいしやくきん、または下くだだされ切りきりのごときは、現いまに常禄じょうろくの外の外に直接ちかぜきの所得しよとくというべし。また藩の諸役所しよやくしよにて公然くわんぜんたる賄賂わいろの沙汰さたは稀まれなれども、自おのずから役徳やくとくなるものあり。江戸大阪たすきの勤番きんぱんより携たずさ帰かへる土産みやげの品しんは、旅費りょひの残のこりにあらざれば所謂いわゆる役徳やくとくを積つみたるものより外ほかならず。

俗官汚吏はしばらく擱き、品行正雅の士といえども、この徳沢の範圍を脱せんとするも、實際においてほとんど能すべからざることなり。藩にて廉潔の役人と称し、賄賂役徳をば一切取らずとて、人もこれを信じ自からこれを許す者あれども、町人がこの役人へ安利にて金を貸し、または態と高利にてその金を預り、または元値を損して安物を売る等、様々の手段を用いてこれに近づくときは、役人は知らず識らずして賄賂の甘き穽に陥らざるを得ず。蓋し人として理財商売の考あらざれば、到底その品行を全うすること能わざるものなり。以上枚挙の件々はいずれも皆藩士常祿の他に得るところのものなれども、今日に至てはかかる無名間接の利益あることなし。藩士の困迫する一の原因なり。

第六、上士族は大抵婢僕を使用す。たといこれなきも、主人は勿論、子弟たりとも自から町に行て物を買う者なし。町の銭湯に入る者なし。戸外に出れば袴を着けて双刀を帶す。夜行は必ず提灯を携え、甚しきは月夜にもこれを携る者あり。なお古風なるは、婦女子の夜行に重大なる箱提灯を僕に持たする者もあり。外に出でて物を買うを賤しむがごとく、物を持つもまた不外聞と思ひ、劍術道具釣竿の外は、些細の風呂敷包にても手に携うることなし。

下士はよき役を勤つとめて兼かねて家族の多勢たせいなる家に非あざれば、婢僕ひぼくを使つかわず。昼間ひるまは町に出いでて物を買かう者少すくなけれども、夜は男女の別べつなく町に出いるを常じょうとす。男子は手拭てぬぐいを以もて頬ほ冠おかむりし、双刀たふを帯たいする者あり、或は一刃ひとやなる者あり。或は昼にても、近きん処じよの歩行あひなれば双刀たふは帯たいすれども袴はかまを着つけず、隣家の往来まゐりなどには丸腰まるこし無刀むたうのことなるもあり。また宴席たけなわ、酒酣さかなるときなどにも、上士が拳けんを打うち歌舞かぶするは極まて稀まれなれども、下士は各おの隠おのし芸うなるものを奏そうして興きようを助たすける者多おほし。これを概がいするに、上士の風は正雅せいがにして迂闊うかつ、下士の風は俚賤りせんにして活澆かつぱうなる者といふべし。その風俗を異ことにするの証は、言語のなまりまでも相同おなじからざるものあり。今、旧中津藩地士農商の言語なまりの一、二を示すこと左のごとし。

上士

下士

商

農

見て呉くれよと　みちくれい　みちくりい　みてくりい　みちえくりい  
 いうことを

行いけよという　いきなさい　いきなはい　下士に同じ　下士に同じ

ことを　又またいきない　又またいきなはい

如何いかせんかと　どをしよをか　どをしゆうか　どげいしゆうか　商に同じ

いうことを

又どをしゆうか

この外、筆にも記しがたき語風の異同は枚挙に遑あらず。故に隔壁にても人の對話を聞けば、その上士たり、下士たり、商たり、農たるの区別は明に知るべし。(風俗を異にす)

右条々のごとく、上下両等の士族は、権利を異にし、骨肉の縁を異にし、貧富を異にし、教育を異にし、理財活計の趣を異にし、風俗習慣を異にする者なれば、自からまたその榮譽の所在も異なり、利害の所関も異ならざるを得ず。榮譽利害を異にすれば、また従て同情相憐むの念も互に厚薄なきを得ず。譬えば、上等の士族が偶然会話の語次にも、以下の者共には言われぬことなれどもこの事は云々、ということあり。下等士族もまた給人分の輩は知らぬことなれども彼の一条は云々、とて、互に竊に疑うこともあり憤ることもありて、多年苦々しき有様なりしかども、天下一般、分を守るの教を重んじ、事々物々秩序を存して動かすべからざるの時勢なれば、ただその時勢に制せられて平生の疑念憤怒を外形に発すること能わず、或は忘るるがごとくにしてこれを発することを知らざりしのみ。

中津の藩政も他藩のごとく専ら分を守らしむるの趣意にして、压制を旨とし、その精



密なることほとんど至らざるところなし。而してその政權はもとより上士に歸することなれば、上士と下士と対するときは、藩法、常に上士に便にして下士に不便ならざるを得ずといえども、金穀會計のことに至ては上士の短所なるを以て、名は役頭または奉行などと称すれども、下役なる下士のために籠絡せらるる者多し。故に上士の常に心を関するところは、尊卑階級のことに在り。この一事においては、往々事情に適せずして有害無益なるものあり。誓えば藩政の改革とて、藩士一般に儉約を命ずることあり。この時、衣服の制限を立るに、何の身分は綿服、何は紬まで、何は羽二重を許すなどと命を出すゆえ、その命令は一藩經濟のため歟、衣冠制度のため歟、兩様混雜して分明ならず。恰も儉約の幸便に格式りきみをするがごとくにして、綿服の者は常に不平を抱き、到底儉約の永久したることなし。

また今を去ること三十余年、固め番とて非役の徒士に城門の番を命じたることあり。この門番は旧来足輕の職分たりしを、要路の者の考に、足輕は煩務にして徒士は無事なるゆえ、これを代用すべしといい、この考と、また一方には上士と下士との分界をなお明にして下士の首を押えんとの考を交え、その実はこれがため費用を省くにもあらず、武備を盛にするにもあらず、ただ一事無益の好事を企てたるのみ。この一条については下士の

議論沸騰ふつとうしたれども、その首魁しゆかいたる者二、三名の家禄かろくを没入し、これを藩地外ほうちに放逐はくして鎮静ちんせいを致したり。

これ等の事情を以て、下士の輩はいは満腹まんぷく、常に不平なれども、かつてこの不平を洩すもらべき機会を得ず。その仲間ななかまの中にも往々おうおう才力に富み品行賤いやしからざる者なきに非ざれども、かかる人物は、必ず会計書記等の俗役に採用せらるるが故に、一身の利害いそがに忙いそがわしくして、同類一般の事を顧かえりみるに違いとまあらず。非役の輩はいは固もとより智力もなく、かつ生計の内職に役えきせられて、衣食以上のことに心を関するを得ずして日一日を送りしことなるが、二、三十年以来、下士の内職なるもの漸ようやく繁はんじよう盛せいを致し、最前さいぜんはただ杉櫓すぎのきの指物さしもの膳箱ぜんぼこなどを製もとゆいし、元結かみいとの紙糸かみいとを捻よる等に過ぎざりしもの、次第にその仕事の種類を増し、下駄傘げだかさを作る者あり、提灯ちようちんを張る者あり、或は白木の指物細工さしものざいくに漆うるしを塗りぬりに至いたりては手業てわざの外に商売を兼ね、船を造り荷物を仕入れて大阪に渡海とかいせしむる者あり、或みずは自からその船に乗る者あり。

もとより下士の輩はい、悉しつかい皆商工に従事するには非ざれども、その一部分に行われるれば仲間なの資本は間接はたらきに働をなして、些細ささいの余財もいたずらに囊底のうていに隠ることなく、金

の流通忙いそがわしくして利潤りじゆんもまた少なからず。藩中に商業行かわれば上士もこれを傍觀ぼうかんするに非ず、往々おうおう竊おみに資本そかを卸おろす者ありといえども、如何いかんせん生来せいらいの教育きよく、算筆さんひつに疎うとくして理財りかんの真情しんじやうを知らざるが故ゆゑに、下士げしに依頼いらいして商法しやうぽうを行いうも、空むなしく資本そんぽんを失なうか、しからざればわずかに利潤りじゆんの糟粕そうはくを嘗なむるのみ。

下士げしの輩はいは漸ようく産さんを立てて衣食うけいの患まぬを免まぬかる者多おほし。すでに衣食うけいを得えて寸暇すんかあれば、上士じやうしの教育きよくを羨うらやまざるを得えず。ここにおいてか、劍術けんじゆつの道場みちばを開ひらいて少年せうねんを教おしる者あり（旧來きうらい、徒士と以下の者ものは、居合いあひ、柔術じゆうじゆつ、足輕あしがるは、弓ゆみ、鉄砲てつぽう、棒ぼうの芸げいを勉つとむるのみにて、槍術そうじゆつ、劍術けんじゆつを学まなぶ者もの、甚はなだ稀まれなりき）。子弟しゆじを学塾がくじやくに入れ或あるは他国たこくに遊学ゆうがくせしむる者ありて、文武ぶんぶの風儀ふうぎにわかに面目めんもくを改あらめ、また先まきの算筆さんひつのみに安やすんぜざる者多おほし。ただしその品行へいんの敵げんと風致ふうちの正雅せいがとに至いたりては、未いまだ昔せき日じつの上士じやうしに及およばざるもの尠すくなからずといえども、概おほしてこれを見れば品行へいんの上進じやうじんといわざるを得えず。

これに反さかして上士じやうしは古いにしより藩中はんちゆう無敵むてきの好地位こうたゐを占しむるが為ために、漸次ぜんじに惰弱だじやくに陥おちるは必然じつぜんの勢いきおい、二、三十年にじゅうさんねん以来いらい、酒しゆを飲いんみ宴えんを開ひらくの風かぜを生なじ（元來げんらい飲酒いんしゆ會宴かいえんの事ことは下士げしに多おほくして、上士じやうしは都すべて質朴しつぽくなりき）、殊ことに徳川とくせんの末年まねん、諸侯しよこうの妻子しよしを放ほう解かいして国邑こくゆうに帰かえすの令いを出いしたるとき、江戸えど定府じやうふとて古來こらい江戸えどの中津藩邸なかつはんていに住じゆ居きよする藩士はんしも中

津に移住し、かつこの時には天下多事にして、藩地の士族も頻りに都會の地に往来してその風俗に慣れ、その物品を携えて帰り、中津へ移住する江戸の定府藩士は妻子と共に大都會の輕便流を田舎藩地の中心に排斥するの勢なれば、すでに懦弱なる田舎の士族は、あたかもこれに眩惑して、ますます華美輕薄の風に移り、およそ中津にて酒宴遊興の盛なる、古來特にこの時を以て最とす。故に中津の上等士族は、天下多事のために士氣を興奮するには非ずして、かえつてこれがためにその懶惰不行儀の風を進めたる者というべし。

右のごとく上士の氣風は少しく退却の痕を顕わし、下士の力は漸く進歩の路に在り。一方に疊の乗すべきものあれば、他の一方においてこれを黙せざるもまた自然の勢、これを如何ともすべからず。この時に下士の壯年にして非役なる者（全く非役には非ざれども、藩政の要路に關らざる者なり）数十名、ひそかに相談して、當時執權の家老を害せんとする事を企てたることあり。中津藩においては古來未曾有の大事件、もしこの事をして三十年の前にあらしめなば、即日はその党与を捕縛して遺類なきは疑を容れざるところなれども、如何せん、この時の事勢においてこれを抑制すること能わず、ついに姑息の策に出で、その執政を黜けて一時の人心を慰めたり。二百五十余年、一定不変と名けたる權力に平均

を失い、その事實に顛あられたるものは、この度の事件をもつて始とす。(事は文久三癸亥きがいの年に在り)

この事情に從したがつて維新の際に至り、ますます下土族の権力を逞たくましうすることあらば、或は人物を黜ちゆうし或は禄制ろくせいを變革し、なお甚はなしきは所謂要路いわゆるの因循吏いんじゆんりを殺して、當時流行の靑面書生せいめんしよせいが家老參事の地位を占めて得々たるがごとき奇談をも出現すべきはなるに、中津藩に限りてこの變を見ざりしは、蓋けだし、また謂いわれなきに非ず。下等土族の輩はいが、数年以來教育に心を用るといへども、その教育は悉しつ皆上等土族の風を真ま似たるものなれば、もとよりその範圍はんいを脱だつすること能あたわず。劍術の巧拙こうせつを争あわん歟か、上土の内に劍客はな甚はなだ多くして毫ごうも下土の侮あなごりを取らず。漢学の深淺しんせんを論ろんぜん歟か、下土の勤学きんがくは日淺ひあさくして、もとより上土の文雅に及ぶべからず。

また下土の内に少しく和学を研究し水戸みとの学流がくりゆうを悦よろこぶ者あれども、田舎いながの和学、田舎の水戸流みとにして、日本活世界の有様を知らず。すべて中津の土族は他国いづに出ること少なく他藩人まじわに交ること稀まれなるを以て、藩外の事情を知るの便なし。故に下等土族が教育を得てその氣力を増し、心の底には常に上土を蔑視べつしして憚はばかるところなしといへども、その氣力なるものはただ一藩内に養成したる氣力にして、所謂いわゆる世間見ずの田舎者なれば、他藩の例に

倣ならつてこれを實地に活用すること能あたわず。かつその仲間の教育なり年齢なり、また門閥もんばつなり、おおよそ一樣同等にして拔群ばつぐんの巨魁きょかいなきがために、衆力を中心に集めて方向を一にするを得ず。ついに維新の前後より廢藩置縣はいはんちけんの時に際し今日に至るまで、中津藩に限りて無事靜穩せいおんなりし由縁ゆえんなり。もしもこの際に流行の洋学者か、または有力なる勤王家が、藩政を攪擾かくじょうすることあらば、とても今日の旧中津藩は見るべからざるなり。今その然しからざるは、これを偶然の幸福、因循いんじゆんの賜たまものというべし。

中津藩はすでにこの偶然の僥倖ぎょうこうに由よりて維新の際に諸藩普通の禍わざわいを免まぬかれ、爾後じごまた重ねてこの僥倖を固くしたるものあり。けだしそのこれを固くしたるものとは市学校の設立、すなわちこれなり。明治四年廢藩のころ、中津の旧官員と東京の慶応義塾と商議の上、旧知事の家祿わかを分ち旧藩の積金つみきんと合して洋学の資本となして、中津の旧城下に学校を立ててこれを市学校と名なづけたり。学校の規則もとより門閥もんばつ貴賤きせんを問わずと、表向おもてむきの名なに唱となうるのみならず事實にこの趣意しゆいを貫つらね、設立のその日より釐毫りごうも仮かすところなくして、あたかも封建門閥の殘夢ざんむちゆう中に純然たる四民同権の一新世界を開きたるがごとし。

けだし慶応義塾の社員は中津の旧藩士族いすに出る者多しといえども、従来少しもその藩政くちばしに嘴くちばしを入れず、旧藩地に何等なんらの事変あるも恬てんとして呉越ごえつの觀かんをなしたる者なれば、往々おうおう

誤て薄情の譏は受るも、藩の事務を妨げその何れの種族に党するなどと評せられたることなし。故にこの市学校を設立するにも、真に旧藩地一般のためにするの事実明白にして、何等の陋眼をもつてこれを視るも、上土を先にするといふべからず、下土を後にするといふべからず、その目的とするところは正しく中津旧藩の格式りきみを制し、これを制して共に与に日本社会の虚威を压倒せんとするものごとくにして、藩士のこの学校に帰すると否とはその自然に任したりしに、士族の上下に別なく漸く学に就く者多く、なかなづく上等士族の有力なる人物にて、その子弟を学校に入る者も少なからず。

すでに学校に心を帰すれば、門閥の念も同時に断絶してその痕跡を見るべからず。市学校は、あたかも門閥の念慮を測量する試験器というも可なり。(余輩もとより市学校に入らざる者を見て悉皆これを門閥守旧の人というに非ず。近来は市校の他に学校も多ければ、子弟のために適當の場所を選ぶは全く父母の心に存することにして、これがため、敢てその人物を軽重するにはあらざれども、真に市校に心を帰して疑わざる者は、果して門閥の念を断絶する人物なるが故に、本文のごとくこれを証するのみ。) 下等士族の輩が上土に対して不平を抱く由縁は、専ら門閥虚威の一事に在て、然もその門閥家の内にて有力者と称する人物に向て敵対の意を抱くことなれども、その好敵手と思う

者が首として自から門閥の陋習を脱したるが故に、下士は恰も戦わんと欲して忽ち敵の所在を失うたる者のごとし。敵のためにも、味方のためにも、双方共に無上の幸といふべし。故にいわく、市学校は旧中津藩の僥倖を重ねて固くして真の幸福となしたるものなり。

余輩の所見をもつて、旧中津藩の沿革を求め、殊に三十年来、余が目撃と記憶に存する事情の変化を察すれば、その大略、前条のごとくにして、たとい僥倖にもせよ、または明に原因あるにもせよ、今日旧藩土族の間に苦情争論の痕跡を見ざるは事実において明白なり。（今年数十名の藩士が脱走して薩に入りたるは、全くその脱走人限りのことにして、爾余の藩士に關係あることなし。）然りといえども、今日の事実かくのごとくにして、果して明日の患なきを期すべきや。これを察せざるべからず。今日の有様を以て事の本位と定め、これより進むものを積極となし、これより退くものを消極となし、余輩をしてその積極を望ましむれば期するところ左のごとし。

すなわち今の事態を維持して、門閥の妄想を払い、上士は下士に対して恰も格式きみの長座を為さず、昔年のりきみは家を護り面目を保つの楯となり、今日のりきみは身を損じ愚弄を招くの媒たるを知り、早々にその座を切上げて不体裁の跡を収め、下士



もまた上士に對して 旧 怨を思わず、 執 念 深きは婦人の心なり、すでに和するの敵に向うは男子の恥るところ、 執 念 深きに過ぎて進 退窮するの愚たるを悟り、興に乗じて深入りの無益たるを知り、双方共にさらりと前世の古証文に墨を引き、今後期するところは士族に固有する品行の美なるものを存して益これを養い、物を費すの古吾を變じて物を造るの今吾となし、恰も商工の働を取て士族の精神に配合し、心身共に独立して日本国中文明の魁たらんことを期望するなり。

然りといえども、その消極を想像してこれを憂うれば、また憂うべきものなきに非ず。数百年の間、上士は压制を行い、下士は压制を受け、今日に至てこれを見れば、甲は借主のごとく乙は貸主のごとくにして、未だ明々白々の差引をなさず。また上士の輩は昔日の門閥を本位に定めて今日の同権を事變と視做し、自からまた下士に向て貸すところあるごとく思うものなれば、双方共に苟も封建の残夢を却 掃して精神を高尚の地位に保つこと能わざる者より以下は、到底この貸 借の念を絶つこと能わず。現に今日にても士族の仲間が私に集会すれば、その会の席順は旧の禄高または身分に従うというも、他に席順を定むべき目安なければ止むを得ざることなれども、残夢の未だ醒覚せざる証拠なり。或は市中公会等の席にて 旧 套の門閥流を通用せしめざるは無論なれども、

家に帰れば老人の口碑も聞き細君の愚痴も喧しきがために、残夢まさに醒めんとしてまた間眠するの状なきにあらず。これ等の事情をもつて考るに、今の成行きにて事変なれば格別なれども、万に一も世間に騒動を生じて、その余波近く旧藩地の隣傍に及ぶこともあらば、旧痾たちまち再発して上土と下土とその方向を異にするのみならず、針小の外因よりして棒大の内患を引起すべきやも図るべからず。

しかのみならず、たといかかる急変なくして尋常の業に従事するも、双方互に利害情感を別にし、工業には力をとみにせず、商売には資本を合せず、却て互に相軋轢するの憂なきを期すべからず。これすなわち余輩の所謂消極の禍にして、今の事態の本位よりも一層の幸福を減ずるものなり。けだし人事の憂患、消極の域内に在るの間は、未だその積極を謀るに違あらざるなり。

今消極の憂を憂てこれを防ぐにもせよ、積極の利を謀てこれを求めるにもせよ、旧藩地にて有力なる人物は必ずこれを心配することならん、またこれを心配して実地に従事するについては様々の方便もあらん、また様々の差支もあらん、不如意は人生の常にしてこれを如何ともすべからず。故に余輩の注意するところは、未だ積極に及ばずして先ずその消極の憂を除くの路に進まんと欲するなり。すなわちその路とは他なし、今の学校を次第

に盛さかんにすることと、上下士族相あいたがい互いに婚姻こんいんするの風を勸すすむることと、この二箇条のみ。そもそも海を觀みる者は河を恐れず、大砲を聞く者は鐘しょうせい声せいに驚おどろかず、感かん応おうの習慣じゆんかんによつて然しかるものなり。人の心事しんじとその喜憂きゆう榮えい辱じよくとの關係けんけいもまた斯かくのごとし。喜憂榮辱きゆうえいじよくは常に心事しんじに從したがつて變化へんかするものにして、その大おおいに變かずるに至いたつては、昨日けふの榮えいとして喜よろこびしものも、今日は辱じよくとしてこれを憂うれふことあり。学校の教しやうは人の心事しんじを高こう尚しやう遠えん大だいにして事物じぶつの比較ひかくをなし、事變じへんの原因げんいんと結果けつことを求めしむるものなれば、一聞一見も人の心事しんじを動かさざるはなし。

地理書を見れば、中津の外に日本あり、日本の外に西洋諸国あるを知るべし。なお進すすんで、天文地質の論を聞けば、大空たいくうの茫ぼう々ぼう、日月星辰じつげつの運轉うんてんに定則ていそくあるを知るべし。地皮ちひの層々、幾千万年の天工てんこうに成りて、その物質ぶつの位置ちゐに順序じゆんじゆの紊みだれざるを知るべし。歴史れきしを読めば、中津藩もまたただ徳川時代三百藩の一のみ。徳川はただ日本一島の政權せいけんを執とりし者もののみ。日本の外には亞細亞アジア諸国しよこく、西洋諸洲しやうしやうしゆの歴史れきしもほとんど無数むすうにして、その間には古こ今英雄こんいゆう豪傑ごうけつの事跡じせきを見るべし。歴アレキサンダー山ア王レキサンダー、ナポレオンナポレオンの功業こうごうを察さつし、ニウトンニウトン、ワットワット、アダム・スミスアダム・スミスの学識がくしきを想像さうざうすれば、海外かいがいに豊太閤ほうたいこうなきに非あらず、物徂徠ぶつそらいも誠まことに東海とうかいの一小先生いっせうせいしんのみ。わずかに地理歴史ちりれきしの初歩しよぽを読むも、その心事しんじはすでに旧套きゆうたうを脱だ

却つきやくして高尚ならざるを得ず。いわんや彼の西洋諸大家の理論書を窺うかがい、有形の物理より無形の人事に至るまで、逐ちくいち一これを比較分解して、事々物々の原因と結果とを探索たんさくするにおいてをや。読よみてその奥に至れば、心事恍爾しんじこうじとしてほとんど天外に在あるの思おもいをなすべし。この一段に至いたりて、かえりみて世上の事相を觀みれば、政府も人事の一小区のみ、戦争も群兒の戯たわむれに異ならず、中津旧藩のごとき、何ぞこれを齒牙しがに止とむるに足らん。

彼の御広間の敷居おひろまの内外を争い、御目付部屋おめつけべやの御記録ごきろくに思おもいを焦こがし、然ふつぜんとして怒り莞爾かとして笑いしその有様ありさまを回想すれば、正まさにこれ火打箱ひうちばこの隅すみに屈伸くつしんして一場の夢を見たるのみ。しかのみならず今日に至いたりては、その御広間もすでに湯屋ゆやの薪たきぎとなり、御記録も疾とく紙屑屋かみくずやの手に渡りたるその後において、なお何物に恋れんれん々々すべきや。また今の旧下士族が旧上士族に向い、旧時の門閥もんぼつ虚威きぎを咎とがめてその停滞ていたを今日に洩もらさんとするは、空屋あきやの門かどに立て案内を乞こうがごとく、蛇へびの脱殻ぬけがらを見て捕とらえんとする者のごとし。いたずらに自みずから愚ぐを表あらわして他の嘲あざけりを買あうに過ぎず。すべて今の士族はその身分を落したりとて悲しむ者多けれども、落すにも揚あぐるにも結局物の本位を定めざるの論なり。平民と同格なるはすなわち下落ならんといえども、旧主人なる華族かぞくと同席して平伏へいふくせざるは昇しやう進しんなり。下落を嫌きらわば平民に遠とほざかるべし、これを止とむる者なし。昇進を願ねがわば華族に

交まじわるべし、またこれを妨さまたぐる者なし。これに遠とほざかるもこれに交まじわるも、果してその身に何の軽けい重じゆうを致すべきや。これを是これ知らずして自みづから心を悩なやますは、誤ご謬びゆうの甚はなはだしき者というべし。故に有形なる身分の下落げらく昇しょう進しんに心を閑ひませずして、無形なる士族固有の品行を維持いじせんこと、余輩の懇こん々こん企望きぼうするところなり。ただこの際において心事の機を転ずること緊要にして、そのこれを転ずるの器械は、特に学校をもつて有力なるものとするが故に、ことさらに藩地徳望の士君子しくんしに求め、その共に尽力して学校を盛さかんにせんことを願うなり。

中津の旧藩にて、上下の士族が互に婚こん姻いんの好よしみみつうを通つうぜざりしは、藩士社会の一大欠典にして、その弊へい害がいはほとんど人心の底に根拠して動かすべからざるもののごとし。今日に至いたりまれは稀まれに上下相婚する者もなきに非ざれども、今後ますますこの路を開くべきの勢いきおいを見ず。上士の残夢未だ醒さめずして陰いんにこれを忌いむものあれば、下士は却かえつつこれを懇望こんぼうせざるのみならず、士女の別べつなく、上等の家に育いくせられたる者は実用に適せず、これと婚姻を通つうずるも後日生計ごじつせいけいの見込なしとて、一概に擯ひん斥せきする者あり。一方は婚を以て恩徳おんとくのごとく心得、一方はその徳を徳とせずしてこれを賤いやしむの勢いきおいなれば、出しゅつ入にゅうの差さ、甚はなはだ大にして、とても通婚つうこんの盛さかんなるべき見込あることなし。

然しかりといえども、世の中の事物は悉しつ皆かい先例なに倣ならうものなれば、有力の士は勉つとめてその魁さきをなしたきことなり。婚姻はもとより当人の意したに従がつて適不適もあり、また後日生計の見込もなき者と強しいて婚こんすべきには非ひざれども、先入するところ、主となりて、良り偶ようを失うの例も少なからず。親しん戚せき朋友ほうゆうの注意すべきことなり。一度ひとび互に婚姻すればただ双方り両家りょうけの好よしのみならず、親戚の親戚に達して同時に幾家の歡よろこびを共にすべし。いわんや子を生み孫を生むに至ては、祖父を共にする者あり、曾祖父を共にする者あり、共に祖先の口碑こうひをともしして、旧藩社会、別に一種の好情帯を生じ、その功能こうのうは学校教育の成せい跡せきにも万ばん々ばん劣おとることなかるべし。

## 青空文庫情報

底本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」講談社学術文庫、講談社

1985（昭和60）年3月10日第1刷発行

1998（平成10）年2月20日第10刷発行

※旧字の「與・餘・竊」は、底本のママとしました。

入力：kazushi

校正：田中哲郎

2006年11月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 旧藩情

福沢諭吉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>